列の中の彼

有馬頼義

講談社版

行列の中の彼

昭和三十六年十一月二十日　第一刷発行
三〇〇円

著者　有馬頼義
東京都文京区音羽町三ノ一九

発行者　野間省一
東京都千代田区神田旭町九番地

印刷所　星野精版印刷株式会社
東京都文京区音羽町三ノ一九

発行所　株式会社　講談社
振替　東京三九三〇
電話大塚(九四)大代表三一一一

（製本　黒柳）

© 有馬頼義　一九六一

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目

次

雪の底……七
専務の誘惑……二六
惜しくはない……四六
夜の部屋……六七
夜半の雪……八八
めざめ……一〇八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

あなたは下手……一二九
カナリヤ……一四〇
集中豪雨……一七〇
梢の秋……一八九
ほどこし……二一〇
わたしの愛したひと……二三〇

行列の中の彼

装幀　長尾みのる

雪の底

一

その辺は、冬になると、雪が、深い。小さな町だが、交通は途絶する。しかし、交通が途絶しても、その小さな町は、少しもあわてることはなかった。秋口に、冬の間の、食糧も、燃料も、家の中に運んであって、ぬくぬくと、冬がすごせるのであった。ぬくぬくとした冬は、貧富の差に、人々の目を向けることをさまたげた。人々は、一様に、冬の間、雪の底に沈んでしまった。いろりの火の色のまわりにだけ、冬の生活があった。父親と母親。——それに、自分と、幼い弟。四人きりであった。記憶によれば、春先、雪がとけはじめると、町の人達は、屋根の雪を、シャベルでおろした。その雪が、道のまん中に、山をつくった。白い雪ではなくて、泥のまじった雪であった。その汚れた雪の山が、毎日、だんだん、低くなった。道を、黄色い水が流れた。畑も、土手も、黄色い水の下になった。その頃になると、母親は、家の中を洗い、雑貨の看板を表へ出した。父親が、様々なものを、仕入れに出かけ、弟は、膝まである長靴をはいて、学校へ行った。

母親が死んだとき、父親は、店をしまった。人手がないからであった。父親は、子供達に、あまり期待をかけていないようであった。その頃の記憶は、断絶している。少しあと、父親は、電力会社の、高圧線監視人になった。家を貸して、一家は、さらに、山の奥へ移った。それから先のことは、よく覚えていた。生活は、大してかわりはしなかった。やはり、冬になると、雪にとじこめられた。雪は、町よりも深いようであった。一家に与えられた小屋は、二坪程の小さなもので、春、雪がとける頃から、秋の終りに、高圧線が、風に鳴る頃まで、父親は、毎日、山を歩いた。それが、父親の仕事であった。弟は、学校へ行く。遠くなった。家の中の仕事は、自然、残された友絵の責任になった。冬の来る前に、友絵は、母親ののこして行ったモンペをはき、山へはいって、冬の間の、たき物を集めて、せっせと、小屋の裏手へつみ上げた。その、たきものが、長い冬の間の、親子三人の生存を支えるようであった。山へはいってから、二年経っていた。波山友絵は、その時、十八歳であった。時には、父親のかわりに、スキーをはいて、高圧線の塔の間を、何度か往復した。友絵の友は、自然であった。熊はいないが、野兎は、よく、友絵の前を走りぬけた。山の中に、人はいない。天気のいい日は、目をあいていられない位、明るい。そういう生活の中で、友絵は、成長した。子供の頃に住んでいた町へ出ることはあっても、鉄道に乗って、更に、南の、そして北の都会へ出かけたことがない。波山友絵は、野性の女であった。そんなある秋の深い頃、峠で、ひとに出会った。相手は、学生であった。遊びに来たようではない。人おじをしない、もんぺ姿の友絵を見て、学生は、びっくりしたようであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「君は、何をしているひと？」と、学生は、きいた。
「高圧線が通っているでしょ。監視人よ」
「君が？」
「あたしのお父さん。でも、時々、こうして、あたしがかわりに歩くの」
「何処に住んでいる？」
「この下の小屋」
「休ませてもらえるだろうか？」
「いいわ」と、友絵は答えた。
学生は、脚絆をまいていた。友絵といっしょについて来て、父親にも会った。
「大学へ行っているんですよ。国有林の調査に歩いているんです」
「時々、この辺へ来るの？」
「いや、この辺は、はじめてだ。しかし、また来るかも知れない」
「東京の大学？」
「そうだ」
「理科ね」
「そうだ。君は、高校を出ているのか？」
「一応」と、友絵は答え、町はずれにある、ちゃちな校舎の姿を、思い出した。
「こんなところにいて、寂しいだろう？」

「寂しくはないわ」
「東京へ、遊びに来れば、案内してやるよ」
「そう。でも、いつ行けるか、わからない」
「山女だな」と、学生は笑った。
「そうよ」
お茶を出そうとすると、学生は、リュックサックの中から、粉のコーヒーを出して、父親と、友絵に振舞った。友絵は、コーヒーというものをのんだのは、はじめてであった。うまい、という感じはしなかったが、学生の出した角砂糖に、少し興味を持った。
「弟に、下さい」
「角砂糖か？」
「そうよ」
「みんな、置いて行ってやる。僕は、もう東京へ帰るのだ。東京では、角砂糖は、あまり使っていない。さらさらした粉の砂糖をコーヒーに入れる」
「町にいた頃、砂糖は置いたけれど、角砂糖は、知らなかったわ」
「このまま、なめても、甘いだろう。弟さんは、何年生だ？」
「中学校の二年」
「よろこぶだろう。みんな上げる」
「すみません」

学生は、すっかり、温まった、と言って、腰を上げた。友絵は、町へ出る道を、教えた。
「また、来るかも知れない」
「どうぞ」
「そのときは、お土産を持って来よう」
「家へ泊って、山を歩くと、いいわ。でも、冬の間は歩けない。四月になってから」
「約束は出来ないが、——僕の名前は、島崎雪夫というんだ。P大学の二年生だ」
「そう。また会えたら、いいな」
学生は、それには返事をしないで、山をおりて行った。そして、大学生が、手帳を破って書き残した、見知らぬ町の名前だけが、友絵の手に残った。弟は、もらった角砂糖を大事にして、一日に一個だけ、出して来て、なめた。角砂糖は、雪と同じように、白い、と言った。
その冬は、何となく、寂しかった。早く春が来ればいいと思った。夕方、風が出て、凍った電線が、ひょう、ひょうと鳴った。
寝つきが悪くなったのを、父親は、知ったようであった。暗い中で、父親は
「友絵は、いくつになった?」ときいた。
「十八よ」
「十八か。町にいたら、嫁に行く心配をしなければならない年齢だ」
「そんなことは、どうでもいいわ」
「春になったら、ひまをやるから、一度、東京へ行ってみるといい」

「こわいでしょ」
「あの学生は、悪いひとでは、なさそうだ」
「あのひとのところへ行くの？」
「ほかに、伝手が、ないじゃないか？」と、父親は言った。
「そうね。でも、学生だから、親と一緒に住んでいるでしょう」
「そうだろう、学校の友達で、東京に住んでいるひとは、いないのか？」
「いないことはないけれど、住所がわからないし、お互いに変ってしまったから、行ってみようとは、思わない」と、友絵は答えた。

波山友絵の前半生は、孤独であった。自分の中に、人生に対して、積極的に動こうとするものがない。黙って、父親と、母親の生活の中にいた。しかし、時々、空想をしないわけではない。素敵な人に出会って、素敵な生活をする。——しかし、どういう生活が素敵なのか、具体的に想像することはなかった。たきものを集めたり、家の中のことをすることを、苦にしたことはない。しかし、それでも、友絵の中の女が羽搏くことがあり、そして羽搏いても、それだけに終った。友絵は、平凡な、田舎娘になろうとしていた。この生活では、ほかに道が展けるわけはない。しかし、その晩は、学生のことを考えていて、なかなか眠れなかった。

今年も、雪の来るのが近い。朝早く小屋を出て、枯れ枝を集め、河原にころがっている流木を、かついで、小屋へ運んだ。父親は、古びたスキーの手入れをした。ラジオも、テレビも、勿論ない。電灯だけは来ていたが、夜遅くまでつけておくと、大へん不経済で、そのために、

生活をおびやかされるような気がして、早く消した。風が出ていた。いろりの火も、消えかかっていた。

二

思いがけず、島崎から手紙が来た。その手紙は、雪の中を郵便配達人が、スキーをはいて、とどけてくれた。

その節は大へんお世話になりました。そっちはそんな気ではないでしょうが、僕は、日が経つにつれて、君達と一緒にいた数時間のことが、忘れ難くなってゆくのを感じます。多分、いや、確実に、今、そこは雪の中でしょう。寒いけれども、今年の東京は雪が少ない。年々雪は少なくなるのだ、とひとは言っています。雪がないかわりに、かわいた、つめたい風が吹き、方々の看板や、戸が音を立てる。道を、埃が、走ってゆく。荒涼とした感じです。東京の街が、クリスマスや、お正月のために、どんなに熱心に飾り立てても、その荒涼は、消えることはない。人間のしていることの無意味さが、わかるようです。その証拠に、東京には、これだけの人が集まっているのに一人、一人は、ひどく孤独です。孤独だから、集まっているのでしょう。無意味に、彼等は、——僕は学生だから、社会の、ほんの一部分としか接触を持っていないのだが、彼等は酒をのみ、麻雀をやり、映画館の前の、あくどい絵の前に立止っている。僕の郷里は、はるかに南の国だ。そこだって、大した違いはないのだが、

太陽が、輝いているだろう。米が、二度、とれます。そこの、澄んだ小川を泳いで育った。東京へ勉強に出て来たのは、何かの間違いではなかったのか、と考えることがある。理科を、いや森林植物を専攻したことは、僕の意識の下の願望だったのかも知れない。東京で暮していると、不幸なひとが、いっぱいいることに気付きます。そして驚いたことには、その不幸な人々は、自分が不幸であることを知っている癖に、自分の力で、そこからぬけ出そうとはしないで、社会が悪いのだ、政治が悪いのだ、と思い込んでいる。誰かが、何かを、してくれるのを、じっと待っているように見える。そして、彼等は、選挙にも、無関心だ。ある朝、突然に、一人の革命家があらわれて、自分達を救ってくれることを信じているかのように。火種が、なくなってしまった。蒲団をかぶるしか、手がない。また、手紙を書きます。

友絵は、島崎に、返事を書きたいと思ったが、文章を書くことに馴れていない。心が臆した。臆したら、文章が書けるわけがない。島崎の手紙は、大事にして、机がわりのミカン箱に入れておいたが、よく、意味のわからないところがあった。手紙の文章だけを見ていると、意味がわからないのだが、数時間の間一緒にいた島崎の姿や顔を思い出すと、手紙の中の、わからない部分が、何かの意味で深まるような気がした。しかし、やはり、返事を書きたい、と思っても、書けなかった。そのうちに、かんじんの、島崎の顔の印象が記憶の中で薄れはじめた。それが完全に消えてしまうと、手紙の中に、埋めることの出来ない空洞があくようであった。最初の友絵の手紙は、そういう時に、そういう理由から、書かれたのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.